

1977 年 12 月 3 日 第三種郵便物認可(毎月 18 回 1・2・3・5・6・7 の日発行)
2025 年 5 月 9 日発行 増刊通巻 8694 号 SSKP たこの木通信 451 号

SSKP

たこの木通信

451 号

(2025/5)



電話：042 - 389 - 1378

E-MAIL：takonoki@dream.jp

ホームページ：https://takonoki.net/

郵便振替：00100-2-24685

たこの木連続講座「かかわりの社会学」日程と場所のお知らせ。

6 月 1 日(日)

場所 諏訪地区市民ホール 2 階 (第 1 会議室)

時間 13:30～16:30

5 月 16 日の夜たこの木連続講座運営委員の zoom 会議があります。今月のたこの木通信は発行日も同じ日の 5 月 16 日、つまりたこの木通信発行作業が終わった後に zoom 会議です。ですからこの zoom の内容というかテーマなどの決定事項をお伝えすることはできません。すみません。ただスラックで実行委員の方から下記でいこうというのがあって私もそれでいいかなと思うのですが決定ではありません。でもまあこんな感じでやるのではないかなと思うので興味あるかたはぜひご参加下さい。

2025 年 6 月 1 日(日)

テーマ 『知的障害をもつ人への心理療法の可能性』について

話題提供者 中島由宇さん 聞き手 三井さよさん

申し込み・・・

(申し込まなくても参加できますが、人数把握のため申し込んでももらえると助かります)

問い合わせ・・・たこの木クラブ(横田)

今回のテーマは私(横田)にとってはかなり興味、関心が以前からあって、しかも心理療法なんていうと「共に生きる」系の人たちからはかなり評価低く、私がたこの木クラブで活動始めた18年くらい前なんて、河合隼雄とかユングとかの愛読者だった私としては、もう心理療法全面否定といった感じのたこの木クラブなど「共に生きる」系の世界は私にとって、かなり「生きづらい」世界だったなと今さらながら思います。そこまで心理療法とかを全面否定して、共に生きる系の人たちってどんだけ自信過剰なの？と思わずにはいられませんでした。ですから先月のたこの木通信でも引用した渡辺琢さんの「障害者の傷、介助者の痛み」(発売日2018年12月11日)という本はかなり私には画期的でした。2018年12月という今から約6前。

まあ、逆にずっとずっと以前には医療系の人たちは共に生きる系の人たちを全面否定していたわけですから、当時は相手を全面否定して戦うしかなかった。それ以外道はなかったと思います。

あと学者、そう三井さんのような学者もかなり共に生きる系の人たちからは評価低かった。敵視してるみたいな感じで。まあこれはたこの木クラブに18年間いた私の偏った感想に過ぎないのだろうけど。それで今回6月1日のたこの木連続講座。時代の流れ？やっぱこれまで懸命に戦ってここまで「共に生きる」社会を築いてきた先輩たちにとっては不快、あまりいい気のしない講座なんじゃないかな？とかなんとか好き勝手なこと書かせてもらっとるわけでございますが、明日はたこの木通信発行日という事で、なんか空白の1日的な感じで今書いています。私にとってたこの木クラブはそこそこ「生きづらい」世界だった。そして時々逃れようもないくらい苦しい「生きづらさ」を感じる世界でもあった。でもある程度「生きづらい」世界で生きていないと人間生きていく力が失っていく気もする。最近スポーツジムで筋トレやってるからかもしれんけど。あの苦しい筋トレは少なくとも私の場合自由に自分の意思でやめようと思えばすぐにやめられるし、苦しさの後には爽快感も期待できる。今のたこの木クラブなんて私にはほど良い「生きづらさ」というか。だから「生きづらさ」がほど良くはなく「生きづらさ」に本当に苦しんでいる人、その苦しみからどう逃れたらいいのか八方塞がりな人、あるいは支援さえあればその本当の苦しみから逃れることができるとか、そんなあたりが支援の対象なのかな？いいかげんなこと書いてすみません。でも自分自身をいいかげんな状態にしておかないと介助する時しんどいですよね。(横田)

『知的障害をもつ人への心理療法の可能性』という文章について

今回は 6 月 1 日に開催予定の連続講座の話題提供者である中島由宇さんの文章を取り上げる。本来なら、彼女の著書、『知的障害をもつ人への心理療法』の紹介をすべきところだが、購入したものの読めていない(汗)。彼女自身が書いた研究交流会報告があった(この文章 WEB 上にある)のでそれについて書く。著者の中島さんは三井さよさんに紹介されて、たこの木クラブに来ている、とのこと。

この文章の構成は

1. 出発点となる問題意識
2. 主な研究
3. 最近の関心と今後の研究展望
4. 授業への展開

今回はこの 2～3 を紹介する。

1 の問題意識もとても興味深く、箇条書きにまとめたのだが、紙幅の関係で略。そんなに長くないし、この問題意識の部分は読みやすいので実物をどうぞ。

2. 主な研究

「知的障害をもつ人に対する関心の向かいにくさとは何か」という問いを携え、筆者は研究の方向を 1)～3) の 3 つにまとめる。

- 1) 知的障害概念の概観
- 2) 知的障害をもつ人の「わたし」が立ち現れる実践についてのアクチュアルな探究
- 3) アクチュアルな探究の方法論的検討

1) 知的障害概念の概観

ここで、著者は日本における発達障害の枠組みから知的障害が根拠なく外されたとするのだが、経験的にはそれが外されたという感じはない。この短い文章で根拠までは書かれていない。この著者が書いた『知的障害をもつ人への心理療法』という書籍で該当部分(18 頁)を読むと、「自閉症などを伴わない知的障害」に関しては、現在も発達障害と呼ばれないので、そのことを指しているようにも読める。

そして、この部分の説明の最後で「知的障害を含む機能障害をもつとされる人とその周囲の人との関係性において絶えず更新され

(「ほんの紹介」してない 87 回目)の相対的な構成概念として 発達障害を捉えることの今日的意義が書かれている。

2) 知的障害をもつ人の「わたし」が立ち現れる実践についてのアクチュアルな探究

この冒頭で「発達障害を捉えた上で、知的障害をもつ人の「わたし」が関係性においていかに立ち現れるのかということを中心に検討してきました」(強調・引用者)と書いてある。

そして、「「わたし」とは「関係性において暫定的に結ぼうとするまとまり」であり、「関係性」とは「「わたし」と「わたし」のあいだで展開するアクチュアルな相互作用」であると相互補完的に定義することができます」という。

その上で、研究手法として、知的障害者に関する参与観察や心理療法の実践事例から、抽出されたのは、として

・第 1 に、知的障害をもつ人における「わたし」の特有のありかた

・第 2 に、知的障害をもつ人への心理療法のプロセスの特徴

という 2 点が提示される。

第一の特有のあり方として提示されるのが、「知的障害を持つ人のあいまいな「わたし」のありかた」。その理由として挙げられているのが周囲の人の知的障害者との関係の取り方とそれへの当事者の反応。

・当事者の情動にチューニングし共にあろうとする同調的なかわりをもつことが圧倒的に少ない。

・しかし、指示的「な対応をとりやすい。

・当事者の側は自分からの発信が微弱で

・指示的な対応に合わせ過剰的適応に振舞いやすい。

知的障害のない人の側の対応の仕方は確かにそうだと思う。しかし、当事者の反応の仕方については本当にそうかという思いが残る。「発信が微弱」だと書かれるが、それは発信が微弱なのではなく、発信を読み取れていないことの方が多いのではないか。また、「過剰的適応に振舞いやすい」というのは、知的障害のない人の反応と比較して、という話だと思うが、知的当事者が非知的障害者と比較して、「過剰的適

応に振舞いやすいと言えるかどうかはかなり懐疑的だ。そういう人がいるのは間違いないが、知的障害が原因で指示的な対応に合わせられない人も相当に多いのではないかな。

確かに知的障害当事者の「まとまりとしてのわたし」は把握しにくい。それを【あいまいな「わたし」のありかた】と呼んでしまっているのかどうか、悩ましい。そのわかりにくさは単に非知的障害者の側の理解の幅の狭さという風に考えることも出来るのではないかな、とも思える。

しかし、この著者がこのあとで主張する部分には、心理療法や精神医学の問題は抜きにして、関わり方の方法として同意できる。それは以下の部分。

そうした知的障害をもつ人における「わたし」のありかたを踏まえた心理療法においては、かわり手(セラピスト)が、知的障害をもつ人(クライアント)の「わたし」が在るということを前提として受けとめ感知しようとする態勢をとり、彼ら(クライアント)の自発的表出を敏感に捉えようとし、その素直な感受と内省に努め、情動的応答を返すことによって、彼ら(クライアント)の「わたし」の把握と表出が促進され、相互主体的関係性の構築へと至り、それに伴って彼らの精神医学的問題が軽減することもある

3)アクチュアルな探究の方法論的検討

この稿は難しく、おそらくほとんど理解できてないので飛ばすが、以下に引用する結語の部分は興味深かった。

ここで想起すべきことは、アクチュアリティを他者と共有していくためにはことばを用いるしかありませんが、アクチュアリティをことばという形態で表し尽くすことは原理的に不可能であるということです。事例研究方法で得られた知は必ず、臨床心理実践の現場に投げ返され、さらなる発見と言語化につながっていくというプロセスに置かれる必要があるのです。臨床心理学における事例研究法は、アクチュアルな場の只中でそれを汲もうとし、さらにそれをアクチュアルな場に戻していくという循環に位置づけられる、生きた現場でよりよい臨床実践を創出する最前線における研究的営為であると考えられます。

さまざまな当事者に関する研究で得られた知を現場に投げ返すことの必要は臨床心理学に限らず、すべての研究に求められているのだと思

う。そして、それが行われなことはいまだに少なくないとも感じている。だからこそ、ここは何度も強調したい話ではある。

それと同時に、この冒頭部分には別の視点から、違和感が残った。言葉を用いることが出来ない知的障害者は少なくない。ことばを用いることの出来ない当事者とアクチュアリティを共有することはほんとうにできないのだろうか？ 言葉を用いずにアクチュアリティを共有できたのではないかなと思える瞬間があるのだが、それは幻想なのだろうか？ 「アクチュアリティをことばという形態で表し尽くすことは原理的に不可能」なのは、そういうことから言えるのではないかなと思うのだった。

そして、文章は、3 方向の研究の説明を終え、以下の 4) に続く

4)見出されつつある知見—あたりまえのまなざしの不在

ここの結語部分で著者は、知的障害の概念定義すらはつきりしていないのに、知的障害者に関心が示されない理由として、「知的障害をもつ人への軽視、人が人に向けるあたりまえのまなざしの不在」をあげる。ここは大事なポイントだと思う。

あまりにもいいものとして扱われてきたことの結果としての、いまだに多数存在する入所施設であり、家族介護が出来なくなったら、そのような場所で暮らすしかないと思われることとながっているように思える。

3.最近の関心と今後の研究展望

は短い文章でわかりやすとても共感した。以下、前半のみ

あたりまえのまなざしが不在である関係の場に、いかにまなざしを向け、「わたし」を見出そうとしていくか。筆者がこれまで行ってきたこと、これからより発展させていかなければならないことは、まなざしというアクションとそのリサーチの循環です。

ぜひ WEB から全体を読んで欲しいと思うし、関心がある方はたこの木連続講座へどうぞ。

(障害という表記についても書きたいことがあるが紙幅が足りない)

つるたまさひで(相談支援事業所ここん)

2025 年度たこの木全体会に向けて 2

2025 年度たこの木全体会

日時：2025 年 6 月 22 日（日）13 時半～16 時半

場所：多摩市諏訪市民ホール 2 階 第 1 会議室

（多摩市諏訪

内容：これからのたこの木クラブの活動を巡って

※特定非営利活動法人ねじり草の通常総会も合わせて開きます。

※終了後、交流会を開きます。合わせてご参加ください。

今年度のたこの木全体会の日程は、上記の通り決まりました。多くの方々のご参加をお待ちしています。

内容として挙げた「これからのたこの木クラブの活動」を巡ってという話。

まだ漠然とした想いではありますが、特定非営利活動法人ねじり草・基準該当居宅移動支援事業所はてなのたねとたこの木クラブの 3 つの団体でこれまで担ってきた取り組みについて、これまでを振り返りこれからの取り組みについて皆さんと考えていきたいと願っています。

現東京都福祉健康財団より受けている地域福祉振興事業助成は、その当初たこの木クラブとして受けていました。「先駆的・開拓的事業に助成する」事を趣旨とし、当初は法人格がなくても受ける事ができました。公金を法人格のない団体に助成することは、都としても大きな決断でした。助成するにあたっては、その内容面が重視され懸命に申請団体とやり取りを重ねていました。たこの木としては「地域づくり」と言う枠で子ども会活動や拠点づくりのための助成を受け、後に現在の「自立生活獲得プログラム」と言う枠で受けるようになりました。

その後、都は助成に際し法人格を求めるようになり、たこの木クラブを法人化する事を良しとしない私たちとの話し合いの結果、たこの木の活動の内「事業」と言う形で取り組めるものをねじり草として取り組む事となりました。

更に時代が進み、様々な制度が生まれてくる中で法内事業への移行が進みました。そして、現在残っている助成団体は法内事業に移行できないものであり、事業が縮小される中で、助成事業そのものを廃止することになっています。

故に、新規事業は認めず、さらには内容の変更を認めず、もっぱら数字と言う実績のみをみるという状況となっています。

制度が進み、法内事業として安定的に取り組めることは良しとしても、「自立生活」や「自立生活支援」にまつわる課題はまだたくさん残されています。私たちは、時代状況に則してプログラムの内容の変更を求めています。叶わない状況が続い

ています。そして、形骸化する助成事業内容に対し私たち自身も単なる数字を出すだけでは不十分であると常々感じています。

とは言え、助成を受ける事で場を確保できる。又、たこの木とはてなのたねとの連携によって、様々な取り組みができるのも確かで、助成事業廃止の方針に対し私たちはいかに向き合っていくかが課題となります。

たこの木は、(はてなのたねを立ち上げる以前)措置制度の時代に多摩市の委託を受ける形で居宅介護とガイドヘルパー事業を新たな法人を立てて担い始めました。支援費制度に移行する中、事業は急激に拡大し当事者に対する自立生活支援と事業としての取り組みが二律背反する事態へ陥りました。

「誰もが地域でともに生きる」事の一つに「自立生活」と「自立生活支援」とがあると考えてきました。その実現のためには支援の「量」と「質」の両方が必要です。しかし、当初制度が毎年変わっていく状況下でその両方を展開する事は難しく、「量」についてはたこの木と株分けし、連携する形を取りました。その後、当事者たちとともに築いていく上で必要となる「質」を巡りはてなのたねを立ち上げました。その際に基準該当事業所にこだわったのは、「質」を求めていくためには、都の指定を受け広く量を求めるのではなく、各自治体との連携のし易さや煩雑になる事務作業や事業所整備にかかる時間を当事者と向き合う時間に充てようと考えたからです。又、全ての自治体が基準該当事業所を認めているわけではないので、他の自治体で自立生活を求める人が現れた時、当該自治体の介護派遣を担える事業所と連携し実現に向けた取り組みを指向してきました。又、「量」として指定事業所との連携にも努め、個々の当事者にとって必要となる支援を伴い築いてきました。さらに言えば、事業を始めるにあたり基準該当であればハードルが低く、当事者の暮らしに近い人たちが支援の核となれるよういろいろ指向してきましたが、実際は叶わない状況が進んでいます。

ねじり草とはてなのたねを立ち上げた想いや長年の取り組みを簡単に述べましたが、いずれも時代の変化とともにその役割の在り方は良くも悪くも大きく変化しているように思うし、変化させなければならないと感じています。

その根っこにあるものは、たこの木が取り組んできた事がたこの木がなくても成り立つものにしていきたいという点です。

居宅介護事業に名乗りを挙げ取り組み始めた頃は、知的当事者に対する派遣を担う事業所は皆無と言って良いほどでした。それ以前に取り組んできたたこの木の活動を通じ、ガイドヘルプ事業は当初予算の7割を私たちが消化するような状況でした。それが今日重度知的当事者に対し派遣する事業所が増え、「自立生活」の実現に向けた事業所も増えてきました。

又、かつてかぼちゃ畑と称した体験室を持ち、一人一人の自立生活の獲得に向けた取り組みを担っていましたが、今日、事例が増える中で体験室がなくてもいきなりアパートを借りて自立生活を実現する取り組みも増えてきました。

そのような状況下で、これまでの取り組み方ではない取り組みをこの状況下で考え取り組む必要があると思います。

しかしその一方で、先日とある事業所からの相談がありました。「一人暮らしをしている全身性身体障害の方が、8事業所から介助派遣を受けているが、当事者自身は、そのコーディネートを担いきれず、知的当事者の自立生活の場ではどのようになされているか」というものでした。

複数事業所による支援の必要性を訴えてきた私ですが、8事業所も相手に当事者自身がコーディネートを担うという事は非常に大変な事です。又、重度知的当事者においては当事者自身がその役を担う事はさらに難しい事です。

どの事業所も人手不足の故に、できる介助の枠を少しずつ集めて組み合わせなければならぬ状況です。しかし、誰がそのコーディネートを担えるのか？本来はその取り組みを実際に派遣する事業所とは分けて取り組む必要があると思うのですが、そのような制度はなく今後ますます大きな課題となっていくと感じています。

この事を一つとっても、障害当事者たちが地域で暮らし続けるには、まだまだ多くの課題があります。制度の隙間に陥りなんともしがたい状況。未だに行政は、施設入所を軸に置いて障害者の支援を指向しているため、地域で暮らすための制度を巡り行政に対し訴え続けなければ改善されて行かない状況があります。

当事者の暮らしも支援を担う人の暮らしもどちらも保障されて行かなければなりません。しかし、制度や事業化が進む中で時に当事者と支援者との関係が分断されかねない状況が生じる。そもそもは「地域でともに生きる」事を願い始めた事業が、当事者を前にして職として取り組む人と友人知人と言う形で関わる人との分断を生じさせている状況も感じます。

そんな事をあれこれ思い描く中、事業や制度の担い手から離れた取り組みの必要を感じています。

又、たこの木クラブ代表の私自身の想い先行で切り拓いてきた取り組み方は、ある面多くの方々に評価されるようになりましたが、その一方で私がいなくなった後の事を考えなければならない歳になってきたという現実もあります。

何をするにしても活動の原資について考えなければならない面はあります。とは言え37年前当初の専従費は4万円(家賃の額)で、今日まで多くの方々に支えられここまでやって来れました。それをすべての人に求める事では決してありませんが、当初の想いに立ち返りつつ、今日状況下で何をどのように担っていく必要があるのか？

今全体会においていろいろな角度から皆さんとともに考えたいと願います。

6月22日。

今から予定を開けていただき、多くの方々の参加をお待ちしています。

1977 年 12 月 3 日 第三種郵便物認可(毎月 18 回 1・2・3・5・6・7 の日発行)

2025 年 5 月 9 日発行 増刊通巻 8694 号 SSKP たこの木通信 451 号

#Shienin だんらく

浜島恭子

アイルランドの小説を読み聴きしている
(モーヴ・ビンキー著『イヴニング・クラス』
1998 年、扶桑社)。昔観たデンマーク映画
『幸せになるためのイタリア語講座』
(2000 年・脚口ネ・シェルフィグ監督)と
よく似た設定だが、公立高校が主催し、夜
間に空き教室を使って行う社会人向け講
座の話である、というところが気に入った。

前に観た、夜間中学のドキュメンタリー
『こんばんは』(2003 年、森康行監督)で
は、高齢や外国からの夜間中学生の中に一
人だけ少年がいて、家の外で言葉を発する
ことができず昼間の授業には参加できな
かったということだった。はらはらしながら
彼と周囲を見守ったことを思い出す。

その後の夜間中学運動については、『こ
んばんは2』(2020 年、森康行監督)で知
った。この作品では、中高年の外国人移民
の夜間中学生の中に手話通訳を介して学
び直ししているろうの大人の授業場面が出
ていた。

小説では年齢や立場の大いに異なる生
徒同士が学び合う姿に元気をもらった(山
本悦子 作『夜間中学へようこそ』、2016
年、岩崎書店)。また公立の夜間中学開設を
求める自主夜間中学の取り組みも知った
(高橋龍介 著『はじめの一步教室』やって
るよ! 名古屋の自主夜間中学奮闘記』
2024 年、同時代社)。

江口怜 著『戦後日本の夜間中学: 周縁
の義務教育史』(2022 年、東京大学出版
会)では、家事労働などのために学校へ行

くことができなかった子どもへの教育保障
の取組が、学齢期に教育機会を持てなかつ
た高齢者の学びの場として、不登校の子ど
もへの学習支援の場として、また外国語を
母語とする人たちの日本語学校の場合とし
て、様々な人たちを受け入れてきたことが
たどれる。

夜間中学は増加しており、全国で 53 校
(文部科学省「令和 6 年度夜間中学等に関
する実態調査」)あるそうだ。

半公的な、多様な、(昼間には無い)学び
の場が中学・高校を卒業した高齢者にも可
能であればなあ。大学や大学院よりも、中
学や高校の学び直しの方をしたい人は多
いのではないだろうか。私も物理で取った
赤点をいつの日か返上したいと思う。

—

唐突に、日本語の「段落」と英語の「パラ
グラフ」の対比を辞書から引用して終わる:
Oxford Languages

【段落(だんらく)】

1. 長い文章を幾つかのまとまった部分に
分けた、その一くぎり。転じて、物事の切れ
目。例:「これで事件も一(いち)一」

【Paragraph】 a distinct section of
a piece of writing, usually
dealing with a single theme and
indicated by a new line,
indentation, or numbering."the
concluding paragraph"(文章中の特
定の区切り。通常は単一テーマを扱い、改
行、空白、番号などで示される。例:「結論
のパラグラフ」)

(はましきょうこ 雑誌家ときどき支援員)

〔病院という名の入所施設〕

のぶ企画 自分活動家 佐々木 信行

4 月 23 日に「精神医療の根本的変革を求める」院内集会に行きました。そこで成田さんが自分の入院のことを話してくれました。仕事に追われて「うつ」を発症しました。それがきっかけで精神科病院に入院しました。自分にも精神科病院が本当にずさんなことがわかりました。ただ入院するだけで社会へのつながりがないことを感じました。病院は体を治すところだとおもっていました。それなのに かねて悪くなるイメージが強くなってきました。精神科病院でも今だに虐待事件が多く起こっています。

特にビックリ八王子にある滝山病院でした。毎日のように虐待が行なわれていました。医師が患者さんに対してビンタをしていた所を監視カメラに写っていました。とても驚きました。東京で転院をするなら滝山病院へと流れになっているほどに有名でした。なんのための入院なのか本当にわからなくなりました。また、静岡県のあるふれあい沼津ホスピタルは、病院側が家族を無視して勝手に医療内容を「強制入院」に変えてしていました。そして、亡くなったケースがありました。虐待と同じです。医師が本当に治療をしていないとおもっています。病院とは言ったらいけないとおもいます。

多くは社会的入院をしている。元気がなくなって どんどん悪くなる一方です。治すのは医師なのに虐待をするのは医師じゃありません。治らないから いつまでも退院が出来ません。

「まるで入所施設と同じです!!」

最近も横浜にある横浜精神医療センターでトイレで倒れていて そのまま 5 日後に亡くなりました。まだ、若い年齢でした。なんだか やりきれない気持ちになりました。うまく治療を行なっていれば助かった命だと思っています。自分が知っているだけでも こんなにあります。まだ、たくさんあると思っています。国としても入院をしない・させないという仕組みをつくってもらいたいと思っています。

【ここからは、むらまつが聞き取ったこと】

若い頃、友人が精神科病院に入院したことがあり行ったことがある。喫煙所でみんな普通にタバコを吸っていて元気なのに、この人たちはなんで入院してるんだろう?と不思議だった。

今まで自分にも入院が必要な時があった。その時は沖縄の伊江島に 3 ヶ月ほど滞在しました。伊江島には何度も福祉研修で行ったので知っていました。島では身の回りのことを自分でやらなくちゃいけなかったけど、他は自由だった。本を読んだり散歩したり。日課は毎日 30 分歩いて郵便局に行って日銭を下ろすこと。ご飯はお弁当を買ったりしていました。今思うと「伊江島に行っててよかった」と振り返れます。成田さんの話を聞いて、精神科病院で強制的に治療されるのは悔しいと思う。伊江島みたいなところに行けてたらよかったなと思います。

愛チャン-00024私と同じ人間をもう1人造るのなんて気持ち悪いワ。

後に私の Papa がもう1人のアタシを造ろうと言う計画を立てますが、私に猛反対されます。

私は DNtype 生体 Android の女の子なので思考型 Hyper Computer Ivory を駆使して創った正真正銘の人間の心と魂と命をチャント持ってます。

私は自分の正体が DNtype 生体 Android の女の子だと言う事が分かってからアタシの Papa がもう1人のお前の体を造ろうと私に言いました。

そうしたら私に「アノネーPapa。この世に私と全く同じ心と魂そして、顔姿形をした人間を人工的に造るんデショ?。」と私は力なく言いました。

「そんなのが私の直ぐ近くに居たら何だか気持ち悪いワ。そのうえ体内構造まで私と全く一緒何デショ?」と私は私の(人工の)大脳で思慮深げに言いました。

私は最後に「第一私と全く同じ顔と心を持った《人工の》人間を造るなんて聞いただけでゾットするワ。」と言いました。

Original の私の体も人工的に造られた体なのに何でもう1人の私の事を人工的に造られた体とか気持ち悪い何て言うんでショウネ?

私と言う1人《人工の》の人間も DNtype 生体 Android と言う人造人間なのに。

その時太平さんが私に向かって、「愛チャン。愛チャンのお家ってここからどれ位離れてるの?」と聞いて来ました。

私は、「この時私の体内に入ってる Internal Bio GPS System が自動的に起動してここから私の家までの距離を Real Time で計算しました。」

私は「太平さん。ここから私の家までの距離は15Km536m43cm14mm251ミクロもあるわよ。」

私は続けて「ここから歩いたらチョット遠いジャナイノ」と言いました。

太平さんが私に向って、「愛チャンバス停は一体どこにあるのかな?」と私に聞いて来ました。

私は太平さんの問いに対して「エートネ∞ーその先の角を曲がっ」
By Sofia The Little Princess

「なんとなく」72

時が過ぎている。今から何かをするには少し遅いかも知れない。

しかし今だからこそ出来る何かがある。ある程度の資金があるので学校へ学び直す事も可能であるし、やる気さへあれば留学も出来る。しかし、やる気が起きないのが現状である。

ただ時間の過ぎるのを待って生きている。特にしたい事もなく。

このままでは駄目だとわかっているが仕事以外では寝食しか出来ない。後 10 年若ければと思う。

鷹野 洋(がんの ひろし) CVV の当事者スタッフ、元介助者

CVV(Children's Views and Voices)とは、子どもの視点と声を大事にしながら、養護施設などで育った経験のある人たちをエンパワメントすることを目的に活動している団体です

『社会的養護の当事者支援ガイドブック

CVV の相談支援』

Children's Views & Voices+長瀬正子著

頒価：900 円

問い合わせ

大阪市北区西天満 4-1-4 第三大阪弁護士ビル

503 号 葛城・森本法律事務所内

CVV 事務局

Tel : 06-6130-2930 fax : 06-6365-1213

MAIL : yes_cvv@yahoo.co.jp



黄昏時な気分

～社会的養護で育つ子どもたちの暮らしの場所から～

虫歯の治療をきっかけに顎関節症になってしまったアゴの状態も、少しずつ回復してきました。今では、とりあえず自分が食べたいものを食べられるくらいにはなっています。ただ、フランスパンのような硬い食べ物はアゴに負担がかかるため、なるべく避けるようにしています。

いつも髪を切ってもらっている美容師さんも顎関節症だと知り、「治ることはなくても、そのうち慣れますよ」と言われました。

どこかで「治る」「元通りになる」と淡い期待を抱いていた僕にとっては、「慣れる」という言葉は、少し考えさせられるものでした。そうか、もう若くはないのだから、あちこちガタがきている身体とうまく付き合っていく術を身につけていく必要があるのだなと。

思い返せば、腰痛だってあります。それがすっきり軽くなる日なんて、これから訪れるとも思えません。筋トレのようなことはしていませんが、体力維持のために、地味にラジオ体操をしたり、自転車で通勤したりしています。

今の僕にとっては、日常をまわしていくだけで精いっぱい、新しいことに挑戦するような余力はあまりありません。でも、今やっていることをなるべく丁寧に取り組んでいけたら、それだけで十分よくやっている、と自分をねぎらうようにしています。

そういえば、今年のゴールデンウィークは珍しく 3 連休が取れたので、家族で温泉旅館に泊まってきました。普段、僕の休日は家で静かに体を休める時間になっていますが、こういうゆったりした時間も、これからはもっと大事にしていきたいと思うようになってきました。

とはいえ、社会的養護の現状については、課題が山積みです。そのことに関しては、少しでも良くなるように、これからもエネルギーを注いでいく姿勢は変わりません。

そろそろ明日がやってきます。今日はこのあたりで眠りにつきたいと思います。

それではみなさん、ごきげんよう、さようなら。おやすみ世界。

たこの木インフォメーション

たこの木クラブ公式ホームページの URL は、<http://takonoki.net/> です。

たこの木連続講座「かかわりの社会学」日程と場所のお知らせ。

日 時: 2025年6月1日(日) 13:30~16:30

場 所: 諏訪地区市民ホール2階(第1会議室)

テーマ: 『知的障害をもつ人への心理療法の可能性』について

話題提供者 中島由宇さん 聞き手 三井さよさん

申し込み: 会場にお越しください。

尚、人数把握のため事前に申し込んでもらえると助かります

問い合わせ・・・たこの木クラブ(横田)

2025年度たこの木全体会

日時: 2025年6月22日(日) 13時半~16時半

場所: 多摩市諏訪地区市民ホール2階 第1会議室

(多摩市諏訪)

内容: これからのたこの木クラブの活動を巡って

※特定非営利活動法人ねじり草の通常総会も合わせて開きます。

※終了後、交流会を開きます。合わせてご参加ください。

◆会員募集募集中!

2025年度会員登録をお願いします!

たこの木会員 ¥6,000/年 賛助会員一口 ¥3,000/年

通信購読会員 ¥1,200/年 目標額 120万!!

郵便振替 00100-2-24685 たこの木クラブ

銀行振込 三井住友銀行 永山支店 普通 6424332

※銀行振り込みをご利用の方は、メール等でご一報いただくと
ありがとうございます

★引続き重度訪問介護対象拡大を巡るイベント実行委員募集中!

◎詳細は、たこの木クラブ岩橋までお問い合わせください。

《定期の予定》

- ・毎週水曜日 13:00～18:30 すいいち企画 たこの木ひろばにて
- ・第3木曜日 10:30～17:00 たこの木通信発行作業日

＜その他の予定＞

- ・たこの木連続講座 6月1日(日)13:30～16:30 諏訪地区市民ホール
- ・フィットする支援をめざす会 6月3日(火)19:30～ZOOM及びたこの木
- ・たこの木全体会 6月22日(日)13:30～16:30 諏訪地区市民ホール

たこの木関連本販売中！

「良い支援？」「ズレてる支援！」「支援のてまえで～たこの木クラブと多摩の四十年」

「知的障害・自閉の人たちと『かかわり』の社会学多摩とたこの木クラブを研究する～」

三井さよ

PDF版たこの木通信 DVD(準備号～400号) 頒価 3000円

※たこの木ひろばで購入できます！

テレホンカード販売中：災害時、携帯よりも公衆電話の方がつながりやすい！500度数＝400円で分けます。NTTの固定電話の通話料金の支払いにもご使用出来ます。

※譲ってください

書き損じのはがき・年賀状

事務用品(ノリ・セロテープ：ハサミ等)

※大量のクリアファイルを頂きました。

ご入用の方にお譲りします！

●たこの木通信PDF版お届け中：

通信のページ数並びに発行部数が増え続ける中、
よろしければPDF版で受け取り可能な方は
お申し出ください。

※YouTube たこの木チャンネル開設中！

※詳細は、たこの木ブログでご確認ください(<http://takonoki1987.seesaa.net/>)

【急募！！居宅介護崩壊！！介助事業所募集中】

◎多摩・府中で一人暮らしをしている/始める人の介助者を求めています。
朝夕・泊り・休日等、様々な要望があります。

派遣できる枠がありましたら、ぜひたこの木までご連絡ください。

◎府中市車返し団地近くでアパートを探している方がいます。

借りられる物件や懇意にしている不動産業者の情報がありましたら、
至急ご連絡ください。月～金曜日8:00～9:30と日曜日11時～20時の
居宅介護と移動 支援を担ってくれる事業所を探しています。

・対応可能な居宅介護事業所がありましたらご連絡ください

◎「施設を出て地域での暮らしを始めたい」と願う人からの相談
自閉症を伴う重度知的当事者の自立生活支援に関心のある事業所が
ありましたらともに当事者の暮らしを築いていきましょう。

知的障害者の自立生活(支援付き一人暮らし)に関する疑問と 「一人暮らし」という名の「施設」について

東京都港区 伊東康江

●福祉とは何か

昨年、長年介護をしていた親を見送った知人が、「介護保険という制度は失敗だったと思う」と、しみじみと嘆いていました。

しかし、成功か失敗かの判断基準が、目的に沿うことができたかどうかということだとするのなら、まず、この制度の目的は何なのかという話になります。本人やその家族の支援、ということが目的であるのならば、「失敗」であったと言えるかもしれませんが、健常者社会から邪魔な人たちを排除するのが目的であったなら、ある意味「成功」なのかもしれません。

そもそも論として、「福祉」とは、健常者社会から邪魔になる人を「合理的に排除する装置」ではないかという話です。

・養護学校や特別支援学校・学級の目的は、障害児のためのものなのか、普通学級から障害児を排除するための装置なのか。

・障害者自立支援法、障害者総合支援法の目的は、障害者支援のためのものなのか、健常者社会からの排除のための装置なのか。

・成年後見制度は、認知症高齢者や精神・知的障害者の支援のための制度なのか、契約社会にそぐわない「私人」を定型化(後見・保佐・補助類型)して排除するための装置(民法)なのか。

・精神科病院は、精神病の人のための病院なのか、一般社会から精神障害者を排除するための装置なのか。

これらの制度が、国の描く「排除のための装置」であるとするならば国の目的は達成されており、ある意味「成功」であるのかもしれません。

●排除のための装置

福祉というものが、「排除のための装置」であるとしても、その装置を一切使わずに生活することがはたして可能なのでしょうか。

わが家の息子(36歳)は在宅で、ヘルパーさんと外出をする生活をしています。2021年8月に新型コロナ(デルタ株)に感染して、しばらく利用を控えていた時期がありました。早朝、私が息子を近所に散歩に連れて行っていました。とりあえずは何とかなっていましたし、散歩の途中で娘や息子の同級生の親に会ったりしました。

しかし、私や夫が年を取った時、何とかなるのかどうかはわかりません。

●地域の暮らし

わが家が住んでいるのは、400戸以上もある大型マンションです。

息子が小学生の頃、一人でエレベーターに乗ってしまっ、マンション中を追い回したことがありました。その時に、ふと、400軒もあったら、一軒が1年に1回息子を預かってくれたなら、365日が回っていくんだな、と思ったりしました。リーマンショックの後に、夫がリストラされた時も、お金がなくなったら毎日一軒ずつお米をもらって回れば1年間持つな、と思ったりもしました。実際に預けたことはないし、お米をもらいに行ったこともないけれど、でも、40年近くも住んでいるので、息子のことを知っている人はかなりいます。ヘルパーさんとバスに乗っているのを見かけたと言われたこともあるし、駅や運河等、いろいろなところで目撃されている印象です。

「知っている人がいる」、ということのを大事にしていきたいと思っている次第です。

●重度障害者等包括支援

息子は区分6で行動援護のスコアが満点に近く、18歳(2007年)の申請時点ですでに「重度障害者等包括支援」の対象となっており、重度訪問介護利用が可能になる前から24時間介護が可能でした。しかし、当時、身体障害(I類型)や重複障害(II類型)と違って、行動援護(III類型)の業者は港区内にはなく、東京都全体でも10か所しかなく、そのうちの2か所は親が立ち上げた事業所でした。長時間利用は報酬が安価になり採算がとれないため、一般事業者は乗り出さないのだと思いました。

●「一人暮らし」という名の「施設」

福祉制度を利用した「知的障害者の自立生活(支援付きのひとり暮らし)」は、岩橋さんの言う、「一人暮らし」という名の「施設」、あるいは新しい形の「排除の装置」になりかねない危険性があるように思います。

普通学級の介助員制度と同じでセットで切り離されるということです。

「一筋縄ではいかない保護者」の一人としては、慎重に考えていきたいところです。

じゃすみん通信 ～第93回 変化 の巻～

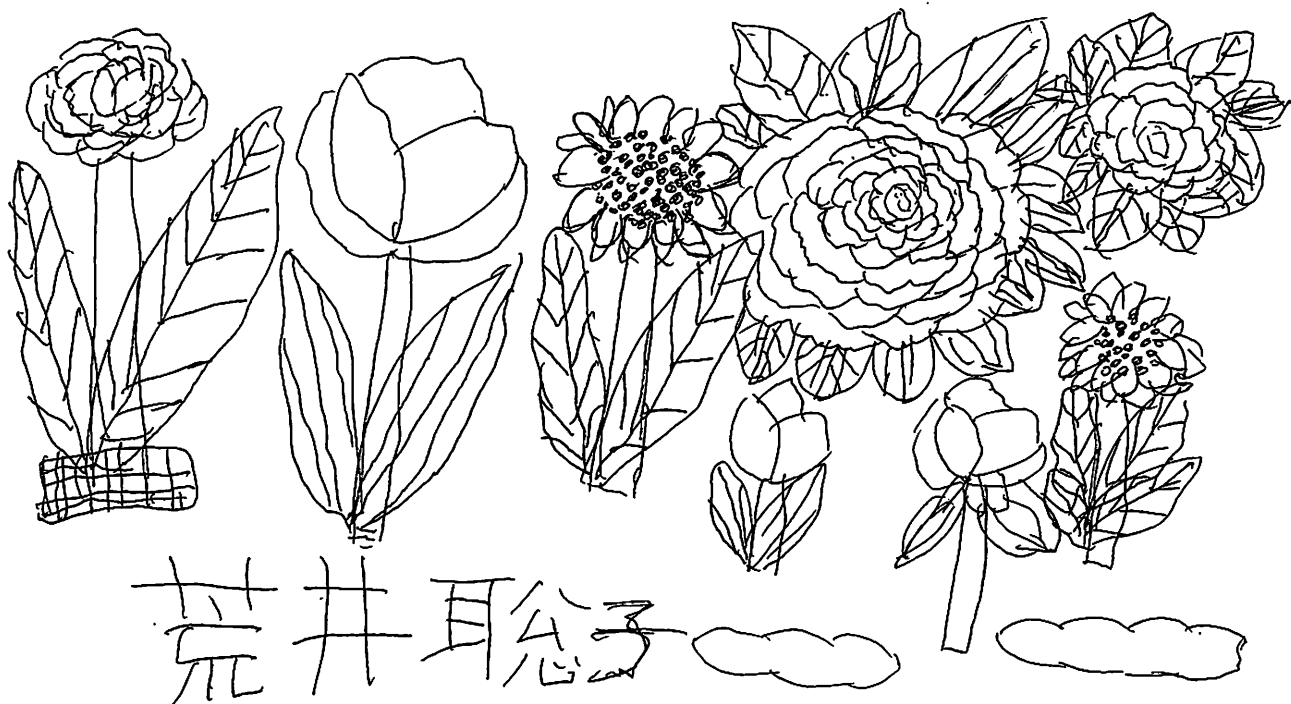
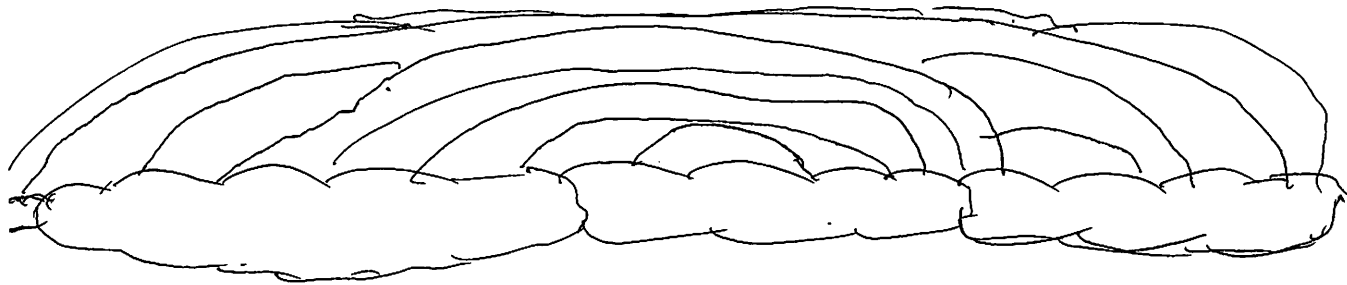
大野沙彩(じゃすみん)

1ヶ月があっという間。早くも術後2ヶ月が経とうとしています。順調に回復はしていて、一見いつも通りに戻っていますが、まだお腹の傷はなんとなくつっぱる時があるし、お腹の中になんとも表現し難い鈍痛が居座っているといえますか。完全に回復はまだかなあという感じ。でもこれは、いついつになったら回復！という話ではなく、時間をかけてゆっくり戻っていくのかなあと思っております。ひとまず元気！！

入院・手術を経て、朝ギリギリまで寝ない・休日もダラダラベッドの中で過ごさないということ意識しています。無理にやっているというよりは、なんかこっちの方が心と時間に余裕ができるなと気付いた感じです(遅い)。朝もギリギリまで寝ないってだけでめっちゃ早起きしてるわけでもないし、休日もなんなら目覚めてから多少はダラダラしてる。だから本当にマイナーチェンジといった感じ。でもこのマイナーチェンジでもなんかすごく変化した感があって良い感じ。気持ちもなんかあがるというか安定するというか。あと、なんか、何を経て変わったのかわからないんですけど、イライラが長続きしない、あんまり気にならなくなった、と感じている今日の頃。イラっとする場面はあるしそこは変わらないんだけど、その「イラッ！」が長続きしないというか、いつまで経っても同じ出来事に対してイライラしていないというか。「ま、いっか」みたいになる。気にならなくなったのも同じような感じで、「ま、いっか」に落ち着くという感じ。先日久しぶりに夜勤に入って実感しました。下着一枚だけで洗濯機を回そうとする当事者を目の前にしたら、いつもなら「明日にしたら？」と提案していたと思います。「こんな時間に下着一枚で洗濯機まわすんかー」って。でもそんなこと思わず「回すのね、おけー」くらいで受け流せたというか。ほんとに、「明日にしたら？」と提案しようとも思っていなくて、そのままの行為をそのままで受け流せた感がすごかったんです。後になって気付いたけれど。(でもこれはその時の当事者の行動や私の対応の良し悪しを判断するものではないです。悪しからず。)これは一体何が変わったことによって起こった心境の変化なのかは謎ですけど、なんか、メンタル的には良い感じです。手術してよかった。笑

マイナーチェンジでもチェンジはチェンジ、変わった・変えたことには違いない。これって大きなことだし、すごいこと。何かやりたい、何か変えたいと思っていても腰が重いことってたくさんあるけれど、ガラッと変えてみると良いんだろと改めて実感しました。結果いつも通りに戻ったとしても、何が自分に大事なのかに気づけるかもしれないし、大事なもののだけ残るかもしれない。もちろん何も変わらないかもしれないけれど笑。と、プラスにばかり捉えているけれど、こちらがマイナーチェンジと思っていても当事者にとっては大きな変化と捉えられることもあるよね、とも思います。だから変化させてはいけない・変化を提案してはいけないということではなく、そう捉えられるかもしれないよねと意識しておくのが大事というか。最後の最後で、こじ付けた感満載の文章になってしまって、なんだかごめんなさい。

今年は年女でありながら本厄の年、なのだけれど、なんだかプラスの変化が多いような気がして嬉しい。(んなこと言ってるって悪いことも起きそうで怖い笑)



荒井聡子

五月! 新しい五月。

理乃さん。
くすのきは黄緑。
理乃さんの好きな色。
やわらかな新芽
あふれ出る香り。
押し出されて、カラカラと
みちにつもる去年の葉
踏みむとや、はり
清らかな香り。



ゆりの木の並木
高い高い、へんまで
いっぱいの花が揺れている。
上を向いたベル。
あつい、光のしずくも受けるコッパ。

今朝、裏の戸を開けたら

ハエメちゃんか
元気よく入ってきた。
びんびん
びんびん
飛んでみせる。
はりきってるね!



外のハルジオンが揺れた。

ネコちゃん? 来たの?

いいえ、風でした。

ネコちゃん、どうしてるかな。

今日も来るといいな。



りのさとのテーブルに、ちよん。と
いさなうさぎ。か。いろ。
理乃さんか、介助者Tさんと作った。
白い紙ねんど。ピンクのほっぺ。
水色のもよう。つぶらな目。
キトンとして、ちょっとおもしろい。
理乃さんの手から、生まれた。
ありがとう。理乃さん。Tさん。

朝、りのさとに来るみちで
見つけた6つ葉のクローバー。
水を入れた小さな器に置いて
うさぎの前に置いたら。
Tさんか、「エサのような
ものかある!」

うふふ。
理乃さんと耳聡子さんと、Tさんと
私と、うさぎのいる朝。

いつものように 訪問看護師さんか来た。

理乃さんに マッサージやストレッチ・筋肉を鍛え
る体操をしてくれる。

「あー タブレット忘れてきちゃった〜。」

時々、タブレットで 理乃さんの大好きだった

「光ゲンジ」の昔の動画を 見せ、聴かせな
がら、やってくれる。

「私、リコーダーあるから、何だっけできるよ。」

いつも 持っている。私は ヒット曲、「泣かない

で〜お 泣かないで〜」の曲、「あめいブル

ーの季節の中で」の曲、「よ〜おこそ〜こ

へお あそぼ〜え パラダイス」を吹いて

みた。

「わあ、やはり、ぜんぜん違うわ。理乃さん、す

ごくよく 聴いてる。顔が シャキッとなった。」

と 看護師さんか言う。あー！ 今まで、理乃

さん、どう思っているのかな。と 自信が なくな

ったけど、カゼン 言周子か出るぜ。聖子ちゃん

明菜ちゃん。理乃さんかコンサートに行くと「たこ

の木通信」に書いてた 岩崎 虎美 たってできる。

なぜだ？ 理乃さんに ひき出される力。行為、

実践、そして リアクション。今、ここに 展開され

る、それゆく 協働力。この 感覚、この 先、突如

規定しなかった ひろく おろかな ことか 起きて

も、きっと 理乃さんという 人に、やっていけるんじ

ゃないか。という、手応えを感じる。きっと。

理乃さんの、大きな 底力。



聡子さんを 結の会に 迎えに行く。「聡子さん、

お疲れ〜。」玄関で 草履を履きながら、聡子さん

か こわばった 顔で「聡子… 結の会のお給料、

もらってない……。」と言った。5日前に出たお給

料。聡子さんか 結の会に行くのは 週2回で、

そのうちの 昨日か 休んだから、今日ようやく 受

け取れる。昨日まで たんとか、ちよとに 辛くなり

ながら のりきった。今日を 逃したら、また 来週

になっちゃう！ あせって 当然だ。みんなと 和気

あいあいと 仕事している中で、いつ 言い出そうか、

チャンスか 見出せ なかったのかもしれない。

「Hさん！」スタッフの H さんを よんでみた。「聡

子さん、何だっけ？」と 私か言う。「聡子、お

給料、もらってない。」と、緊ろ長しなから、はきり

聡子さんか言った。「は〜んた、さっちゃん、言てよ〜」

H さんは にこにこ 笑って 持ってきてくれた。「お疲れ

さま。」聡子さん、めっちゃ ほんとしてた。

数日後、こんどは 聡子さん あしたや 勤務の日。あした
やみどりに 迎えに行く。バス停の方に 歩き始
めたとき、「聡子…… あしたやのお昼代、レシート
もらってない。」聡子さんは 毎日、出勤帳をつけ、
レシートを 見つけていた。「戻ろ？ もらいに。」
と訊くと、「もらってろ。」一 番者に 戻った。
聡子さん、もしもしと 中に入らないから、私か
先に入って「聡子さん」と ロ手ぶ。スタッフの
S さんに、「聡子さんか、何か、忘れたらしい。」
と 告げる。聡子さん、入ってきて、S さんも、聡
子さんに 近づいて、「何？」と 訊いた。やさし
い声で。「… 聡子… あしたやの… あし
たやのお昼……」私に「何だっけ？」
ずいか「レシート？」と言ひ。聡子さんか
「あしたやのレシート もらってない。」と言った。

「あ？ ごめんね、今、出すわ。」S さんか
渡してくれた。よかった。たぶん、ハルパ
ーの「支援」で 聡子さんか、やめた。
みにいっ。形々になって、それは 事実だけど、
なんだか、そういう 社会の流れ、というか、
もともと、聡子さんにとって 緊ろ長せすに
いられる 社会じゃない 中で、こうせざるを得
なくおる こと、たぶん、「支援を必要と
している人」を 無償労働させろ、賃労働
の「支援」を「支援」してみたいだと思
った。



聡子さんと、リ帰ってくる。テーブルに 小さな
いたばの 苗。「あさかあ？」この日 理
乃さんの 命助に入ってる / さんか、「そう、種
か、芽を出して、うれしかったの。聡子さん
に、ひとつ あげちゃって 言したの。」
聡子さんと、いっしょに、ベランダの 植木鉢
に 植えた。きっと 夏の 朝に、ブルーの花
か、ひらきまするわ。理乃さん。たっしめ！
聡子さん、背、高いな。とこの 3 年 感
じる。私か 辛痛んだらう。いや、
ちかう。以前より 近くに いることか
増えたんだ。台所で、ベランダで、理乃
さんの ハやで、近くに 来て 言して くれたり、
手伝って くれたり、一 番者に 何かしたり。
気がつくとき、そこに 居る。この 暮らしか
始めて 6 年。少しだけ 距離感か 希薄な
たのかもしれない。

(23)

社会へ向けてその14

立野 陽太

4月29日に高校の同級生6人で大泉学園にある「カラオケまねきねこ」に行きました。北海道の大学に通っている同級生と毛欠しびりにお会いすることができ、とてもうれしかったです。ちなみに、カラオケまねきねこは「お弁当や飲み物などの持ち込み」可能です。時間は18時30分から23時まで歌いました。私が歌った曲はミセスグリーンアップル「ライラック」、ゴールデンボンバー「女々しくて」、秦基博さんの「ひまわりの約束」などを歌いました。夕食は6人のうち、私と高校の同級生4人は大泉学園駅近くにある「祥龍房」という中華料理の店で「鶏肉とカシューナッツ炒め」「ニラしバーズ炒め」などをテイクアウトして、カラオケボックスに戻りました。残りの2名はローソンで売っている「串の唐揚げ」などを買っている人もいました。最後になりますが、私は就職活動や実習のためにこれから忙しくなるため、現在毎月連載しているたこの木通信はもうしばらくしたらお休みします。就職して仕事に慣れてきましたらまた再開するかもしれません。どうぞよろしくお願ひします。

行ったり来たりして考えていることなど15

井上武史

さて、今年に入ってからお届けしている、ラテンアメリカで大陸規模で大々的に始まっている「ケアシステム」の導入についてつづけます。

これがまず、日本で上野千鶴子さんなどフェミニストたちの運動で「介護保険」によるヘルパー制度が確立したのと同じように、グローバルな規模での女性運動が、国連によって掬い取られ、その政策によって進められ、コロナ禍での各国、各家庭の惨状をどうにかすべきという国際的合意を持って、とりわけラテンアメリカで先駆けて制度化されようとしているということを書いてきました。

そして、前号ではこうした導入を目の前にして、ラテンアメリカで障害者の権利擁護をしているアクティビストたちが、自分たちには何の相談もなく取り残されるという危機感を抱いて運動を開始したことをお知らせしました。そこで、ロビーイングにジュネーブの国連まで行き、ステファン・トロメルというILO国際労働機関で障害者のインクルージョンを担当する職員の方に会ったところまででした。

ぼくは、2022年の8月、障害者権利委員会の日本審査があったときにジュネーブに行ったのが人生で初めてのヨーロッパでした。まさか自分の人生がこんなふうになんていうのは予想もしていなかったのですが、昨年は3月と8月権利委員会が開かれているときに2回ジュネーブに行くことになりました。

3月に行ったときの目的は、その前の年からぼくらのラテンアメリカの自立生活運動のネットワークが協力して展開しているメキシコ発祥の「障害者運動」を国連をつうじて広く知ってもらうために宣伝に行くためでした。ジュネーブの国連周辺で障害者問題に関連して働いているスペイン語を話す人たちの独特のネットワークがあり、こうした人脈につないでくれたのは、ペルー人でここで働くアルベルト・バスケスでした。アルベルトは精神障害当事者のアクティビストで、今年2月の『たこの木通信』でお伝えした友人のコロンビア人アンドレア・バラと同じように、ラテンアメリカでの一連の権利条約12条「法の下での平等」を実現するための法改正の運動のキーパーソンでした。アルベルトは、SODIS, Sociedad y Discapacidad (社会と障害) というペルーでは有名な障害者権利擁護のNGOの代表だったのですが、コスタリカ人で二分脊椎の当事者でもあるカタリーナ・デバンダスが2014年に国連の障害者の権利の特別報告官に任ぜられたときに、彼女の右腕としてペルーから呼び寄せ、コロナ禍の2020年に任期が終わった後も引きつづきジュネーブに残り仕事をしています。

もともと、アルベルトの連絡先をくれたのは、精神医療サバイバーズネットワークをつうじてこのラテンアメリカでの一連の法改正をいち早く追っていた山本眞理さんで、メールをつうじてやり取りをしていたのをこの3月に初めて会うことができたのでした。アルベルトは、ぼくらが進めているその「障害者運動」が、ラテンアメリカに端を発するフェミニストの運動と同じように、リーダーを持たない水平な構造の現代的な運動であるのを見て気に入ってくれて、さまざまこの人に連絡してみたいという人たちを紹介してくれていて、去年の3月にも、権利条約委員会でのプレゼンだけではもったいないので誰かに会えないかな？と相談していたときに会ったといいよと連絡先をくれていたのが、ステファン・トロメル氏だったのでした。

死なないための家3

知り合いから説教される

あ

「屋根」のリフォーム:ペンキ塗りが終わりました。最初は、屋根に登るところから「これからあそこで作業するのか…」と下から見上げるだけでびびっていましたが、もう慣れました。「下塗りが大事」ということで一斗缶を2.5本分の50kgを塗った。右手が軽い腱鞘炎ようになった。なら上塗りのペンキもたくさん要るだろうと、混ぜて使うタイプを10kg準備したら、半分で塗れてしまった。混ぜたら「その日のうちに」使い切らないといけない。後日やる予定の二度塗りを、日も暮れて暗い夜にすることにした。危なくて、良くはないけど慣れるものだ。誰か通る、と思って下を見ると、警察官が2人自転車で前を通った。通報されたかもしれない。ご近所としては怪しすぎるから、やはり良くない。警官は2軒隣の家に入っていた(それはそれで近所の治安が心配)

「死なないための家」よく分からないタイトルだが、思ってることはシンプルだ。だんだん息苦しくなっている感覚があった。「何歳くらいの男性はこんな感じの生活をしている」がしんどくなる。少なからず誰もあるだろう。強く「こうすべき、こうじゃなきゃダメだ」というのは聞かない。優しい社会になった。ただ、受け取るほうに年々過敏になって反応してしまう。「ガス会社」のCM嫌いだな。だいたい子どもが成長し孫が生まれて、いい人生だった【完】。NHKの朝ドラも、週末利用者さんの家で総集編をやっていて「食わず嫌いだったので見てみるか」と見始めたら、やっぱりそれでダメだった(最近のは多様性入れて調整してると思う)。そういえばガスを撤去して屋根に太陽熱温水器載せようとしているのは、CMが嫌いで無意識がそうさせたのか？

YouTubeでリフォームや家の間取りの情報を見る。戸建てを新築するのは子持ち夫婦が大半だから仕方ないとはわかっている。「リビングのここので子どもを遊ばせて、それを見ながら洗い物をして…」、「年頃のお子さんがあると脱衣所とランドリー室は別が」そんなん居ないし関係ない。長期間お金を払い続ける不動産では、どうしても保守的になるから「人生のロールモデル」を使うだろう。「一人用」の居場所は少ない。若者が住むべきワンルームに無理やり住むか、家族向けの3LDKマンションか2階建て戸建てに無理やり住んでリビング以外が物置になる。ワキに追いやられていくことが「死ぬ」のではなく、世の中の人生モデルに沿うにしろ外れるにしろ、それを前提に、何とかそこに引っかかるように進んでいくと確実に終わりに向かっていく。荒川修作さんの理屈と重なるはず。外れてる上に終わりが見えてるとか耐え難いですね、荒川さん。

荒川さんや、何人かの前衛的な人たちのことを見聞きしてから、考えたことのなかった不満や疑念が生まれるようになった。象徴的なのは「トイレ」だ。ある住宅リノベーションの記事に施主の女性が書いていた。「昔から狭いトイレが苦手だった。リラックスしたい時間なのに狭くて冷たい空間に閉じ込められたくない」最初はリビングに便器がどんと置かれる案だったが、友人が頻繁に来るので開放的なトイレのまま玄関室にくっつけてプライバシーは保つようにした。すごくいいアイデア。自分の場合は、それすらも不自由に感じる。誰かと住む前提だからトイレに壁とドアがある。要らない。友達も来ない。面白がって見に来た人がいるなら、むしろ無いほうがもっと面白い。困るのはニオイだけだ。そこだけ強力に換気すればいい。トイレだけの話ではない。「部屋」という概念が「共同生活」を前提としている(そんな訳はないが、そう思えなくもない)。全部リビングでいい、と思って壁を全部はずした。分かったことは、部屋の仕切りがなくて物の整理ができてないと「人の住まい」ではなく「モノの倉庫」になってしまうことだ。

そうやって考えたり実際工事したりと、リフォームを楽しんでいたが、最近ある人から浮わついた気分に冷水を浴びせられた。小さい頃から家族ぐるみで仲のいい友人がいる。大人になってからは年に数回連絡をとりあ

1977年12月3日第三種郵便物(毎月18回1・2・3・5・6・7の日発行)

2025年5月9日発行増刊通巻8694号SSKPたこの木通信451号

う程度になっている。こちらから出向いて久しぶりに向こうの家族と食事することになった。ご両親から近況を聞かれる。自分を身内のようにかわいがってくれる二人には説教されても仕方ない。「いつまでフラフラしてるの！」くらいはあるだろう。それが上の世代の「普通」だろうから。なぜか、ほとんど関わりのなかった向こうの兄弟から説教を受けた。「子孫を残すことは義務」とか「子どもを持てば人は変わる。自分もそうだった」、「60代、70代で結婚した人を知っている。諦めるな」人生100年時代だから、とも言っていた。

「人生100年時代」は、自分も好きな考え方だけど、使い方が逆じゃないか。就職結婚育児引退老後という人生設計だと時間が余るから多様な生き方を模索しよう、だったと思う。親世代から言われるのはいいけど、50代のその人に言われたくはない。そもそも、会うのも話すのも20年ぶりでコミュニケーションとして変だ。説教だけして先に帰ってしまった。

後からダメージが来て、忘れようとしてもフとした時に頭で再生される。何もしてこなかったわけでもない。自分の子どもどころか、きょうだいにも子どもはいないので家系は自分で途絶える。どう処分していくか考えている。リフォームも自分の「棺桶」を自分でデザインしているようなものだ。気楽にやっているように見えるかも知れないが、実際気楽にやっている。それでも、誰も他人には容易にわからないものを抱えている。「子どもを持って変わった」とは、引き換えに他人への想像力を無くしたの、と皮肉も言いたい。友人に愚痴を書いて送ろうかと思ったり、いや「ちゃんと抗議しよう」と思ったり。友人とは長い付き合いではあるが、めんどくさい長文を送りつけるタイプだとは認識されていないから困るだろう。

通信のネタにして頭を整理しようと考えた。腹の立つ説教でも「身内枠」に入れてくれているからこそだろう。ありがた迷惑だが、ありがたいことだ。こちらの無理解もある。友人とは登山や旅行が共通の趣味だったので、友人が育児などで身動きとれない時期にも、旅先でエンジョイしている写真付きでよくメールしていた。気分悪かっただろう。一昨年の年末年始、コロナ後遺症で弱っている時に友人の年賀状の家族写真を見て、メンタルガタ落ちしていた。どちらも何の悪気もない。説教した人も、その人なりの使命感があったのかもしれない。ぼくの方は、その反動で家を買ってリフォームして楽しくやっていた。心外な横やりが入って気分は悪いが、これを期にぼくから自己開示して、お互い触れてこなかった「生き方」などについても話せるようになったら、もっといい関係になるかもしれない。

40代後半に対して、子孫を残す義務と言いながら70代でも結婚しろというのは、どうすれば条件クリアできるんだろう。「賽の河原の石積み」みたいだと思って調べたら「子供が親不孝の罪を償うために」石を積み上げて塔を作るんだそうだ。けっこう当たっているかもしれない。それで「鬼がやってきて破壊してしまうという、永遠に繰り返される苦しみを表現」してる。こんな地獄を思いつく人は、現代の「鬼」だな。

その後、帰省した時にその人の話題を出したら、母親は過去に少しあってわだかまりが残っているらしい。こういう時の母親は胸に留めずにぜったい態度や口に出している。確度の高い想定としては、恨みを買うようなことを無邪気にやっていて、10年越しくらいで息子の自分に返ってきたのかもしれない。これから確かめてみたいが、世代を超えた因縁の可能性に戦慄した。今回の「仇討ち」を誰かに引き継がないといけな。間違っていた。「子孫を残す義務」は正しかったようだ。

【重度訪問介護対象拡大から10年何かイベントやりませんか？ 8】

岩橋誠治

ずいぶん前の話になるのですが、「いわはし～。いつ遊びに来るのか？」と何度も電話をかけてくる知的障害の当事者。「俺の周りには支援者しかいない」と訴えていたその言葉を事あるごとに思い出します。

又、行動障害と評される当事者たちがそれなりの人数通っている生活介護の場に立ち寄ると、「この人のどこが行動障害？」と思えるほどに私の来訪を喜んでくれて、しばし近況報告を交わします。又、当然すべての人が歓迎してくれるわけではないのですが、「この人私の事を嫌っている？無視している？」と思うと、積極的にちょっかいを出してしまう私。回を重ねる内に、あいさつを交わしてくれたりすると小躍りするほどに嬉しくなります。

いつ行っても歓迎してくれる当事者たち。でも、生活介護の職員は「それは、私たちと違い岩橋さんは当事者たちにとってお客さんだから」と言われた事を忘れません。

私にとってその言葉は「お客さんとして認めてもらえているんだ」という肯定的な言葉として受け取っています。そして、日々の実際の様子を聞けば、私が受け取っている者とは異なる壮絶な日常がある事も知っていて、懸命に取り組まれていることに敬意を抱きます。

「支援者ばかり」と言ってもその人たちがいなければ当事者の暮らしは成り立ちません。又、「お客さん」の存在は、日常とは異なる空間を生み出しているだろうと思います。

たこの木30周年記念の写真展を公民館ギャラリーで開いた際、ふらりと立ち寄った何人もの方たちから「この人知っている」という声をかけられました。又、私の知らない方でも当事者とは旧知の中で、昔の出来事を初めて聞くという場面も多々ありました。

制度/支援がある事で地域の中で暮らし続けられるのは確かです。その一方で日々の暮らしを支援している場面以外に存在する当事者もいます。

行動障害と評される人たちの幼い頃の話を知ると、行動障害を引き起こす理由を知り、その事でより当事者が理解できて日々の支援に取り組みやすくなることもあります。

「地域でともに生きる」と言う時の「地域とは何か？」と言う問いを投げかけられる時がありますが、私にとっての「地域」とは、単に様々な人が行き交う場であり、「地域でともに」と言う時には、その一員として障害当事者たちも存在しているという事と考えています。

しかし、現実そうはなっていない。制度が進めば進むほどに、「地域の施設化」を感じてしまうのは、「地域の一員」「様々な人が行き交う中にこの人も存在している」と言う事抜きに、「当事者を支援する」事で分断を生み出し、分断される中で「当事者と支援者」の関係のみに集約されていくからに思います。

そして、行動障害と評される人たちの支援が、「地域に迷惑をかけない」支援となっていくようにも感じる中、この間対象を拡大した重度訪問介護が「地域に住む一人の人」として確立し様々な関係を築いていく事を支援とするようになって欲しいと願っています。

そのあり様は私自身も未だ見えていません。支援会議の場で時折出てくる話の一つとして「ヘルパーは職として関わっている一方で、ボランティアとして関わる人たちは無償と言う状況をどう捉えて良いか解からず悩む。ボランティアであっても何らかの費用を支払う必要がある」と言う話を聞きます。

又、友人知人と言う関係の中で関わっていた人たち。当事者が自立生活を始めヘルパーが対応するようになると、「ヘルパーさんが迎えに来た」と言う事で当事者のみが先に帰るという場面を何度か目にしました。

私がヘルパーとしてそんな状況に出くわすと、当事者が帰りたいタイミングで帰るし、ただただそのタイミングを計っているだけだとその場にいる人たちも気まづくなるだろうと思い、友人知人の輪に私自身も加わる(加えてもらえる)事に努めます。その事で、より当事者の事を知る機会にもなるし、時に親もとにいた時は遊びに誘うにしても当事者の対応の事をあれこれ考えなければならなかったのが、自立生活を始めヘルパーがつくことで、単に場所と時間の調整のみで、気軽に誘えるようになっていく。そんな声かけにヘルパーと友人知人たちが仲良くなっていけば、出かけた先でもともに楽しめる。

「重度訪問介護」の「介護」と言う言い方は、その対象を当事者自身に置いてしまうのですが、それ以前にあった「日常生活支援」であれば「日常生活」にはその人自身に対する支援もさることながら、日常生活の場面には様々な人との関わりがあってそれも含めた支援を描けるように思います。

「日常生活支援」と言う言い方が「重度訪問介護」と言う言い方に変わった経緯をご存じの方がいたら教えていただきたい。

でも、当事者にとってはとにもかくにも暮らしていく上で人の手が必要で、その名称はどちらでも良いと思います。

しかし、重度身体当事者にとってのどちらでも良いは、「自らが介助者を使う」と言う前提があつてのこと。では、重度知的当事者の場合は、「自らが介助者を使う」と言う事に困難さを抱えており、その人たちをも対象を拡大した時の「どちらでも良い」は。介助を担う側が「重度訪問介護」として「個人の介護」を役とするのではない、「当事者の日常を支援する」意識を持ち、その日常には様々な人の関わりが存在し、その存在の一つ一つをつなげていく役として拮げていく必要があるように思います。

言葉で書くとなんだか小難しい話になってしまうのですが、当事者たちと街に出かけ、周囲の人たちとの様々な出来事をいかにしていくかを指向する。そのための事例を共有し合い取り組んでいく。

重度訪問介護研修の内容を見ると、重度身体当事者から始まった故に個人の介護がメインとなっています。それが新たに設けられた「行動障害支援課程」においても個人の行動をいかに支援するかに留まっているように思います。

「行動障害」は当事者本人の状態のみを診るのではなく、関係の中で起こっている面を抱けば、自ずと周囲との関係づくりについても課題として取り上げていく必要があると思います。

そして、それは、単に重度訪問介護と言う枠に留まらない、様々な支援や事業等においても同様の事が言えるだろうし、とかく制度や事業で当事者の暮らしが分断されている状況の中で、重度訪問介護は様々な支援と支援をつなげる事も射程に入れる必要があると思います。

※イベントやりませんか？と書き綴っていますが、ご意見やご感想や様々な事例をぜひたこの木までお寄せください。
そして、ともに対象を拡大した重度訪問介護を巡るイベントを開きたいと願っているのですそのアイデアや企画運営に名乗りを上げていただけるとありがたいです！

【フィットする支援をめざす会】

堤 典子

4/25(金)に長野刑務所に服役するTさんに面会をしてきました。電車の窓から見えるりんご畑は花が満開でした。

Tさんは、いつものようにいろいろ書き留めているノートを手元に面会室に入り座ると、同行してきた職員からボールペンを借りて話を始めます。「堤さんも栄養士になっていればよかったのに」と手持ちのノートに書いたものを見ながら始めました。「えっ！私は70歳過ぎているから、Tさんがなったらどう？」と返すと、私の夫の事や、律ちゃんのことがあったのでと。

人が亡くなることを話題にすることが良くあるので、被害に会わせてしまった人のこと、お父さんも逮捕されて間もなく無くなっているのが繋げて話しているかも知れないなあと感じました。

Tさんは、これまでも伝えたいことがあると何かに例えて話題にすることがあって、何を伝えたいのかわからない状態でいて支援する会で面会や手紙の内容を共有することで、こんなことを言いたいのでは？ということがあります。何のこたなのかよく聞くとNHKの朝の連続ドラマを見ているらしく、病院などで栄養についての管理をしているヒロインのことで、栄養士になっていれば、私の夫(6年前にがんで死亡)と律ちゃん(風で働いていた人ががんで死亡)のことを守れたのでは？というニュアンスでした。

もう少し深く話してみようとしたのですが、栄養の話になり、「栄養は大切だね。一番大切なのは、毎日3食を旬の物といってその季節に撮れるものを食べるのが大切みたい」と話すと、ノートに旬のものと書いていました。

次は「算数や数学の勉強はどうして必要なんだろうかね？」と質問式での話題です。

「買い物をするときに持っているお金でどのくらい買い物ができるか考える時に計算が必要になるね」

「それは算数かも？」という「やりくり！」と言ってました。あと「節約」というので、「節約ということを考えると料理のレシピの本を送るのではなく、気に入ったレシピがあったら、それを手紙に移して送れば、節約になるのでは？」

私は「そっち方がうれしい」という。「本には写真が載っているんで送った」と言ってました。ちょっと否定されたように感じたのか、言いたいことと私が返したことが一致しなかったみたいです。

面会する数日前に、国民健康保険の手続きのために所証明書の退出先を教えてもらうようにと言われていたという内容のはがきが届いていたので、きっとその話になるだろうと準備して行ったら、そのことは解決したそうで、拍子抜けしました。

こちらからは話題を、風(事件前に働いていた喫茶店)を復活させると言っているの、どういうイメージを持っているのか聞きたくて、風のどんなところが好きだったのか？質問してみました。「アイスコーヒやコーヒー、あとおひさまライスとか」と言ってました。

風(ふう)のどういうところが良くて復活させたいと思うのか？もっともっと話してみて、一緒にそこで働いていた私も、なつかしくて振り返りをしたいなあと思うようになりました。

~~~~~

■会の紹介:Tさんの幼い頃を知る一人として、逮捕された直後から関わってきました。改めてTさんとガラス越しに語り合うと、Tさんの支援のみならず地域で暮らす当事者の支援を巡る様々な事を意識されます。常に行きつ戻りつの会です。新たな人の参加を願います！(岩橋)

■オンライン定例会【6/3 火】20:00~21:30頃・042-389-1378・takanoki@dream.jp 横田まで

■カンパのお願い・面会の交通費が足りません！少額でも助かります m(\_\_)m

▶郵便局:00130-7-359996 ▶銀行:〇一丸支店・当座0359996「フィットする支援をめざす会」

## あしたや共働企画で働く常勤スタッフを募集します

### ・・・ハンディがある人もない人も「共に働く」場です

- ・週5日 9時～19時の間で8時間 ・給与 月24万円 + 各種手当
- ・要普通自動車運転免許 ・定年70歳
- ・仕事内一障害者総合支援法就労継続支援B型事業全般および、店舗運営・配建  
清掃など外仕事・食品加工・クラフト作業など
- ・詳しくは面談時にお話しします。 締め切りは6月末
- ・連絡先 042-372-3690 (あしたやみどり) 担当・荒井、岩間

### ——あしたや共働企画ってどんなところ？

あしたや共働企画は「地域で共に働く場」として 1999 年にたこの木クラブから株分けして、2004 年に NPO 法人を取得しました。

永山駅の近くのベルブ永山の中の売店「はらっぱ」と、永山駅から徒歩 15 分位のところにある諏訪団地の商店街の中に「あしたや」(自然食品店)と「あしたやみどり」(古本と手作り雑貨の店)の2店舗、合わせて3店舗の運営をしています。

仕事はそれぞれの力が発揮できるようにと幅広くいろいろなことに取り組み、労働条件を少しでも良くするために売り上げを上げようと、皆で力を合わせています。制度利用をしながらも、なるべく障害のあるなしで線を引きたくないと考えて、「働くってなんだろう」「『共に』ってなんだろう」「対等、平等ってどういうことか」という大きなテーマの前でみんなで考え、試行錯誤をしながら、日々一緒に働いています。関心がある方のご応募をお待ちしています。

=====

### NPO 法人あしたや共働企画 第 23 回総会のお知らせ

日時 2025 年 5 月 22 日(木) 14 時～16 時(開場 13 時半)

会場 諏訪地区市民ホール 1 階第 1 会議室(多摩市諏訪 5-4)

☆議決権があるのは正会員のみですが、関心のある方はどなたでもご参加ください。総会終了後、同会場で交流会を行ないます。

## も く じ

|                                        |    |
|----------------------------------------|----|
| ・表紙                                    | 1  |
| ・たこの木連続講座「かかわりの社会学」日程と場所のお知らせ          | 2  |
| ・『知的障害をもつ人への心理療法の可能性』と言う…ほんの紹介 87 回    | 4  |
| ・2025 年度たこの木全体会に向けて 2                  | 6  |
| ・#shierin だんらく                         | 9  |
| ・[病院という名の入所施設]                         | 10 |
| ・愛チャン-00024 私と同じ人間をもう 1 人造るのなんて気持ち悪いワ。 | 11 |
| ・「なんとなく」72                             | 12 |
| ・世界の片隅で支援をつぶやく 121 ～黄昏時な気分～            | 13 |
| ・たこの木インフォメーション                         | 14 |
| ・知的障害者の自立生活についての疑問と「一人暮らし」というなの「施設」    | 16 |
| ・じゃすみん通信 ～第 93 回 変化 の巻～                | 17 |
| ・荒井聡子                                  | 18 |
| ・社会に向けて その 14                          | 20 |
| ・行ったり来たりして考えていることなど 15                 | 21 |
| ・死なないための家 3 知り合いから説教される                | 22 |
| ・重度訪問介護対象拡大から 10 年 何かイベントやりませんか？ 8     | 24 |
| ・フィットする支援をめざす会                         | 26 |
| ・あしたや共働企画のページ                          | 27 |
| ・もくじ・編集後記                              | 27 |
| ねじり草 第 194 号                           |    |
| ・すいいち日記                                | 2  |
| ・最近のすいいち企画                             | 4  |

### 編集後記

・ここ最近、障害当事者たちの一人暮らしにまつわる対応が増えている。その内容は様々で、一人として同じではなく、正に「その人の暮らし」であることを実感している。

- ・想いがあって、様々な経験から実現可能と思うも、具体的には人の手がなければ何も始められないという現実。
- ・支援を担う事業所の人たちは皆口をそろえて「人手がない」という。それは、決して引き受けたくないという事ではなく、苦渋な想いを感じる。でも、声をかけなければ始まらないのも現実で、とても悩ましい。
- ・又、この間又新たな領域で新たな出会いがあった。でも、新たな領域と言っても、それは、当事者が置かれている状況下で求めた出会い故の事。
- ・出会いが課題解決に向かう実感と、新たな人との出会いは新たな課題に気づかされるので悩ましいのも正直言ってあったりする。 せ

発行人:障害者団体定期刊行物協会

〒157-0072 世田谷区祖師谷 3-1-17-102

編集人:たこの木クラブ

〒206-0025 多摩市永山 1-1-4 ルミエール 103

☎/FAX 042-389-1378

定 価:100 円